
HOST

ゆきうさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HOST

【Nコード】

N8030Z

【作者名】

ゆきつぎ

【あらすじ】

2017年。《精霊》という存在が認められた地球を舞台に、一組の少年と精霊^{バイ}が織り成す恋と波乱の物語…。恋愛要素高め、コメディとシリアスもそこそこに時には派手な戦^{バトル}闘も。

圧倒的初心者が描く近未来SFファンタジー。どうか応援のほど宜しくお願いします。

プロローグ（前書き）

メリークリスマス。そして皆さん初めまして。一応初投稿となりました《ゆきうさぎ》と申します。安直な名前です《ゆきうさぎ》と申します。

初心者かつ若輩者故、文章力乏しく読み難い箇所多数あるかと思われませんが、温かいお茶を共にのんびりと読んで頂けると幸いです。

ブローグ

窓から射し込む光が顔を照らし、目蓋を突き抜けて瞳に刺さった。布団を顔まで引き上げて、朝日を遮断する。が、かなり遅れて耳に響く騒音に気がつき、鬱陶しく思いながら布団から手だけ突き出した。

チリリリリリリ！と、主に与えられた使命を全うする目覚まし時計のスイッチを乱暴に叩き、《少年》は再び温かい布団に包まって寝息を立てる。季節はもう初冬、どんどん強力になっていく布団の温もりという底無しの魔力が、起床の意志を容赦無く削り取る。と、今度は《少年》と共にベッドに潜り込んでいた携帯電話のアラームが、ピピピピッ！ピピピピッ！と、規則正しく喧^{やかま}しい音を撒き散らし始めた。

《少年》は何とも寝苦しそうな呻き声を上げ、毛布の中を探って騒音の元凶を掴み出すと、思い切りどこかへ投げ飛ばす　　が、しかし手に絡みついたストラップに阻まれ、残念な事に携帯はそのまま思い切り振り抜いた腕の先、手首の辺りにぶら下がった。

止まらず鳴り続けるアラームに包まれながら、寝惚けた頭でどうすれば安眠を続けられるのかを思考し続け、そのまま約10分程度が経過。そして

「……ッ」

やっとの事でガバツと勢い良く体を起こし、次いで重たい腕を持ち上げてグシグシと目を擦る。

「……おはよう」

彼一人しかない部屋：家にその声は良く響き、返って来る事がないと分かっている返事を待ったりはせずにベッドを降りた。

ずいぶん前に役目を終えたであろう目覚し時計に適当に目をやり、手首に絡まっているストラップを解きアラームを停止させてから携

帯をベッドに投げ捨てた。

放り投げる際これまた適当に目をやったディスプレイには、《2017-12-1 6:20》と小さく電子文字が並んでいた。

その後ほぼ自動的に洗面所に向かい、水道の蛇口を捻って出てきた冷たい水を顔に叩き付ける。一気に意識を覚醒させ、タオルで乱暴に水滴を拭った《俺》は鏡に映る自分と向き合った。

ハルカリン
春佳凜

17歳の高校三年生。鏡に映る顔は：まあ普通だ。不細工ではないと思っっているし、身長も179センチの細身。とりあえず自分の容姿に満足はしている。慎重があと1センチ欲しいなんて贅沢を言う気もない。

さっきまで眠そうに細く開かれていた黒い瞳を持つ目は、覚醒した後も少し細めに開かれ、やはり眠そうに見える。鼻は大き過ぎず高くもなく低くもなく、口の形も変ではないと思うし、耳もまあ：普通に耳の形だ。

目に少し掛かる程度に揃えてある髪は瞳と同じ漆黑。染めた事なんて無いし、ワックスだなんだは興味を持った事すらない。そのおかげか、たまに知り合いの女子にさえ羨ましがられるサラサラとした髪質は密かに自慢だったりもする。

朝から自分の顔と睨めっこしながら、俺は何となく今日は何をするかと考える：と言ってもまあ、昨日と変わらない。朝食を食べて、昼食を食べて、夕食を食べてそれから寝る。つまり何の予定も無い。「…暇。だよなあ…」

リビングに出ながら伸びをして零す。そう暇。とにかく暇である。多くの学生にとっては《待ちに待った》という表現を使うであろう長期休暇。つまりは冬休み。まさか自分がこれほどまでに暇人という称号を受けるに相応しい人間になるとは思ひもなかった。

11月の末、つまり昨日から12月の10日までの11日間とい

う時間に、何一つ予定という予定が存在しなかった人類が今ここに
いる。

「塚原^{ツカハラ}は旅行だって言ってたしなあ…後はわざわざ誘い合って集ま
るような奴もいないし…」

別に友達がない寂しい奴という訳では断じて無い。

「深咲^{ミサキ}は…まあ、昔みたいにいつも一緒って年でもないか」

寝起きであまり力の入らない体をソファに転がし、テーブルから
TVのリモコンを取り上げてディスプレイの電源を入れた。

本日は快晴！家族やお友達と外へ出かけると気持ち良いで
しょう！

今の俺には何とも空しくなる音声が出力された瞬間電源を落とし
た。リモコンをTVに放り返した。木製のテーブルにプラスチック
がカランツとぶつかる音を最後に、再び家に静寂が訪れた。

「暇だなあ…」

独り言が寂しく部屋に響く。

「今日から12月だなあ…」

独り言が空しく部屋に響く。

「……………」

そして諦めた。目を閉じる…

「ん…」

そして声がした。

「お…」

「ん、んう…っ…！」

伸びをしている気配。

「ふあ…。おはよ。リン」

響く声は 俺の頭の中。

「ああ…おはよう《アイ》」

『うん。おはよう』

目覚めた《彼女》に返事を返すと、二度目のおはようが返ってきた。頭で響くのではなく、今度は隣からより明確クリアに。

ゆっくりと目蓋を開けると、俺の顔を覗き込んでいる真白な《精少女霊》がいた。

2015年。人類は大きな進化を遂げた。もっとも、正しくは進化を遂げたのではなく、既に《遂げていた》というのが正しい。

その《存在》が明らかになってから、世界の常識は大きく書き換えられる事となった。

《精霊》。Spirit

それが人類に接触コンタクトを行った者の名。存在が確認されてから2年経った今でも研究は困難を極めており、その実態は透明で分かっている事は極わずかと言える。

通常人間には見る事が出来ない。接触コンタクトを受けた、世界の人口から計ると極々少数の人間にしかその存在を存在として感じる事すら出来ないからだ。

現在はその存在は幽霊、つまり何らかの精神体（そんなものがあるとするば）のようなものと称され、全人類に認知されている。

だがしかし。それでも何もかもが分からないという事ではないのだ。両手で数えられる程度の人数だが《協力者》が現れ、研究に協力したからだ。

《精霊に選ばれた者達》。彼らの協力により…いや、彼らの協力から得られた情報のみが、現在研究により判明するに至ったものだ。

まず第一に、精霊はその一固体では出来る事は極端に限られている。ただ一つ 人間ヒトへの接触コンタクトだけだ。

次に第二、何故精霊が人間に接触を図るのか。その理由はただ一つ 《共存》。ヒトを…その魂を抛り所とし、《姿》を取り、共に生き そして共存者と共に死に逝く。

そして第三、これで分かっている事は最後であり、そして判明されている中で最も最大の特徴。精霊は共存を受け入れた人間に、その《チカラ》を受け渡す。

正確には一固体では何の能力も持たない精霊が、人間と共存するに至り発現出来る《チカラ》その全権を人間に委ゆたねるという事である。

《協力者》はそれぞれに様々な《チカラ》を持っていた。人間が許されるにはあまりに大き過ぎる力を。ある者は火を自在に操り、ある者は片手で鋼鉄を握り潰し、ある物は生身で宙を舞って見せた。現在確認されている《彼ら》の能力は多岐に渡り、完全に一致するものは無いとされている。人類は彼ら、精霊との共存を選んだ者達…《チカラ》を扱う者の事を《精霊使い》と呼称するようになった。

進化を遂げたとはいえ彼らもれっきとした人類。好き勝手に放置しておく訳には行かない。存在が確認され、その確認数が二桁、三桁を超えるに至って、彼らにも《法》が必要になった。

全国共通のユーザーにのみ適用される法律である。「精霊使いユーザーの能力を軍事利用する事を禁止する」というような大きな内容から初めに制定されていき、いくつもの法が生み出された。

だが実際、その法は人類の法の様な明確な意味、更にはルールとしての縛りを持たない。いや、持つ事が出来ないと言える。何故なら、その法はあくまでも彼らユーザーの《代わり》に人間が決めたものであって、しかもユーザー達の文字通り人知を超えた力を、人間が縛るとするのは到底無理な話だったのだ。

現在その《精霊法》は、言ってしまうえば学校の校則程度の意味しか持たない。例え破ったとしても、悪くて叱られるだけ。気付かれなければ問題ない…そういうった具合である。

世界は当初、当然の如く彼らの暴走…反乱を恐れた。だが、

最早日常の様に増えていく犯罪件数、そこにユーザー達の名が載る事は、世界のどこでも起きなかった。

自然、時間が経つにつれ彼らへの警戒は薄れていく。それどころか、常軌を逸した力を持つ彼らは、逆に事件の解決、災害の起こった被災地での救助活動にも積極的に協力する。

彼らにしたら、それは警戒している世界の誤解を解くという目的と共に、力を持つ自分が困っている人の助けになりたいという、正義感から自然と行動を起こしただけにすぎない。

しかし、人々の目にはそんな事情は関係無かった。魔法の様な、奇跡の様な力で次々と活躍を重ねるユーザー達。まるでマンガやアニメのスーパーヒーローのような彼らに、人類は皆いつしか憧れや敬愛の目を向けるようになっていた。

現在今ではユーザーへの人々の態度は国境問わず皆一様に友好的で、恐れられる事も迫害される事もない。

《精霊が認識された世界》

2017年。それが今の

世界の様相だ。

プロローグ（後書き）

これから始まる物語を、共に追って頂ければ光栄に思います。

連載という形を取らせて頂きますが、更新は不定期になるかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030z/>

HOST

2011年12月25日19時54分発行